日本の学童ほい・く 普及拡大ニュース

全国学童保育連絡協議会

みんなで読もう！ 目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。みんなで読んで、語って、楽しみながら、よりよい学童保育をつくっていきましょう。

2022年12月27日

元気が出るみんなの取り組みをご紹介

楽しく普及拡大

楽しい記事を紹介しながら、ほいく誌の普及拡大を進めよう！

ほいく誌を通して笑顔が広がる、ほいく誌の普及拡大を！

徳島県の取り組み

徳島県学童保育連絡協議会ではここ数年、民間企業へ運営を移行する学童保育があったり、連協離れだったりで、加盟学童保育数が減ってきていますが、県連協としては同じ学童保育の仲間として、研修やほいく誌の案内は継続して行っています。また新たに開設された学童保育へも積極的に声をかけています。

●具体的なとりくみ

[県の研修会で]‥‥ ほいく誌のチラシやバックナンバーを見本誌として配布しています。

[未加入学童保育へは]‥‥ 直接声かけをして、チラシなどを配布しています。

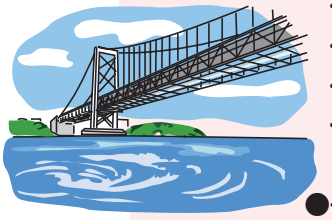
[各市連協・学童保育では]

・ほいく誌を学童保育入り口に置いて、保護者の方に手に取って見ていただけるようにしています。

・新刊の貸し出しやバックナンバーを持って帰っていただいたりしています。

・毎月、学童保育で購読する分のうち1冊を、1年生の保護者へ順に配布しているところもあります。

・保護者会のレジュメに、ほいく誌掲載の「お弁当レシピ」「簡単おかず」、読んでほしい特集の紹介を添えると、保護者の方は会が始まるまでに読んでくださっています。



●子どもや保護者の笑顔を支えに

子どもの絵が、ほいく誌のイラストに採用され、保護者にお渡ししたところ、「全国版の冊子に載せていただき、ありがとうございました。子どもの貴重な思い出になりました」とよろこんでいただけました。子どもも笑顔でとてもうれしそうでした。コロナ禍ですが、ほいく誌を通してたくさんの笑顔が見えるように、一人でも多く興味を持っていただけるように、これからも普及活動をがんばっていきたいと思っています。

学童保育への理解を広げよう深めよう

月刊『日本の学童ほいく』

普及拡大の手引き

- ●働きながらの子育てに
- ●保育実践（生活づくり）に
- ●保護者と指導員の共感を育む
- ●学童保育をよくするために
- ●保護者と指導員が自らつくる
- ●学童保育の専門月刊誌・全国連協の機関誌です

普及拡大に役立つヒントがあります！

日本の学童ほいく 2023年1月号

特集 食物アレルギーを学ぶ

今回の特集では、指導員、そして学童保育に子どもを通わせている保護者が共に食物アレルギーについての基本的な知識を学ぶとともに、保護者や子どもの思い・願い、学童保 での実際の対応などを、交流し、子どもの命と安全を守るうえで必要なことをたしかめあいます。

全国学童保育連絡協議会

日本の学童ほいく 普及拡大ニュース

みんなで読もう目標 3万6000部

2022年12月27日

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。

読者の声

長崎県諫早市●指導員から

夏休みがはじまり、しばらく経った頃、駐車場に1台の車がやってきました。車の中からこちらを見ている女の子。職員が、「あれっ？　○○ちゃんじゃない？」と声をかけると、「わ～え～!!　私のことおぼえてる？」と大騒ぎ。あれこれ話をしていると、福祉系の大学に進学したとのこと。思わず「バイトしない？」と誘いました。とんとん拍子に話が進み、学童保育にアルバイトにきてくれることになりました。小学生の頃と変わらない笑顔で、子どもたちと遊んでいます。

そんななかはじまった2学期。学校に教育実習生がやってきたそうです。子どもたちが帰ってくるなり、「みっき～（私のこと）。○○先生って知ってると？」と尋ねます。「知ってるよ、学童保育に来てたもん」と応えると、「みっき～、いつからおるとさ!!」とびっくりしていました。成長した彼女たちを応援しています。

『日本の学童ほいく』
2023年1月号「読者のひろば」より

山形県天童市●保護者から

2022年10月号の特集「異年齢の子どもたちで仲間関係を紡ぐ――学童保育の生活」を読んで、異年齢の子どもたちが交流することができる学童保育は、子どもの成長という側面から見てもとても貴重だなと思いました。近年はご近所づきあいも希薄になりがちで、誰が住んでいるのかも知らぬまま住む人が変わっていたなんてこともザラです。同じアパートに住んでいても交流がほとんどなく、子どもがいる家庭でも、子ども同士が遊ぶ機会はありません。学校でも行事以外では基本、横のつながりだと思うのです。学童保育では、1年生から6年生までの子どもが一つの空間で過ごしているわけで、考えればすごいことですよね。自分より年上のお兄さん・お姉さんの姿を見てあこがれを抱いたり、自分より年下の子の面倒を見てあげようとがんばったり……。異なる年齢の子ども同士で学べることがたくさんあるのだと思います。指導員の先生方のお話から、家庭では見せない姿に子どもの成長を感じたりすると、学童保育に入れてよかったなと思えます。

10月号の特集の記事では、異年齢の子どもたちの間の交流が、子どもの考え方や意識を変化させたり、「頼れる存在になろう」と他者に視点を向け、気遣いができるようになっていく、そんな成長を読みとることができました。学童保育という居場所が子どもたちにとって居心地のいい場所であること、精神面でも成長させてくれる場所であることが、とてもありがたいです。指導員の先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。

『日本の学童ほいく』2023年1月号「読者のひろば」より

私と「ほ・い・く・誌」

読者リレー執筆・今月は宮城県気仙沼市から
指導員の 菅野勝美 さん

「ケガしないように見てくれたらいいから」と誘われ、指導員になった頃には、小さなプレハブ施設に20人弱の子どもたち。おもちゃも少なく、雨が降る校庭に出て「シャワーのようだ」と遊んだこともありました。小さなくしゃみに神経を尖らせるいまは考えられないことです。

児童数が増えると小学校の空き教室を間借りし、その時期に東日本大震災があって心のケアに取り組み、数年後には新設された学童保育へ引っ越しました。そしてコロナ禍。さまざまな課題には、同僚だけでなく、県内の仲間に相談したり、研修会に参加したり、ほいく誌を読んだりして自分たちの学童保育に取り入れるようにと学んできました。ある講師の「ほいく誌はアンダーラインで真っ赤です」という一言を真似して、私も引くことにしてみました。それまでは活字を追う読み方でしたが、気づきや納得があり、自分はどう考えるかという読み方になってきたようです。また感染症対策の講義での一言。「研究者でもデータの読み違えはある。鵜呑みにしない」。氾濫する情報に影響を受けていた私ですが、必要以上に恐れないというスタンスと自分で考える必要を感じました。感染症のプロではありませんので、なぜ制約を設けるのか子どもたちと話しあうようにしました。学童保育の毎日は考えることの連続です。子どものこと、生活づくり、行事、感染予防などなど。未来ある子どもたちに楽しい思い出をつくってほしいから、毎日ていねいに子ども一人ひとりと向きあっていこうと思います。

編集・発行　全国学童保育連絡協議会　〒113-0033 東京都文京区本郷2-26-13　TEL●03-3813-0477　FAX●03-3813-0765
E-mail●zghrk@xui.biglobe.ne.jp　http://www2s.biglobe.ne.jp/~Gakudou